

# モモせん孔細菌病の抵抗性評価法

国立研究開発法人 農研機構 果樹茶業研究部門 品種育成研究領域 <sup>すえ</sup>末 <sup>さだ</sup>貞 <sup>ゆう</sup>佑 <sup>こ</sup>子

## はじめに

せん孔細菌病はモモの重要病害の一つであり、その病原細菌として *Xanthomonas arboricola* pv. *pruni*, *Pseudomonas syringae* pv. *syringae* および *Brenneria nigrifluens* の3種が報告されており、主病原は *X. a.* pv. *pruni* とされている。病原細菌は傷口や気孔から侵入し、植物体内で増殖した細菌は風や雨によって運ばれ、感染を広げる。そのため、風や雨の多い気象条件で多発しやすく、ある程度以上発病してしまうと薬剤散布の効果は限られたものとなる。病徴は葉、果実、枝に発生する。葉の病斑は初期には水浸状でかすり状になり、褐変した後に病斑中心部が脱落してせん孔病斑へと変化する。病斑が出た葉は徐々に落葉するが、病徴の進行が早く、激しく落葉すると、樹体への養分の蓄積が不足し、結果として翌年の樹勢の低下などの悪影響を引き起こす。果実の病斑は果実の商品性を著しく低下させるため、モモの栽培に与える影響は最も大きい。枝の病斑には、落葉痕などで越冬した病原菌によって春先に形成される春型枝病斑と、春型枝病斑や葉から伝播された菌によって形成される夏型枝病斑とがある。枝病斑は枝枯れの原因となるだけでなく、感染源としての役割も果たす。そのため、感染源となる枝病斑をこまめに切除する耕種的防除と適

期の薬剤散布を併せて行うことによって園内の菌密度を低く保つことが、せん孔細菌病による被害を抑えるためには重要である。

気象条件によって多発しやすく防除の困難な病害に対しては、抵抗性品種の利用など病害の発生が起りにくい環境条件を整えることが有効な対策となる。せん孔細菌病についても抵抗性品種の必要性は認められていたが、有用な育種素材の存在が確認されておらず、また選抜段階で利用できる簡便で安定した評価法が確立していなかったことから、我が国では抵抗性育種の取り組みは進められてこなかった。筆者らは、新梢への付傷接種法によってモモ品種・系統のせん孔細菌病に対する拡大抵抗性を評価し、抵抗性の品種間差異について明らかにするとともに抵抗性育種のための育種素材の探索を行った (SUESADA et al., 2013)。

本稿では、モモ品種のせん孔細菌病抵抗性の評価に関するこれまでの取り組み、付傷接種法による抵抗性の評価、および抵抗性育種に向けての課題等について紹介する。

## I せん孔細菌病に対するモモ品種の抵抗性の評価

せん孔細菌病に対する抵抗性の品種間差異については、古くから圃場における自然発病度（落葉度、病斑葉率）による評価が行われてきた。品種の抵抗性の強さに

表-1 報告されているモモ品種のせん孔細菌病に対する感受性の差異

	発生のほとんどないもの	発生の少ないもの	発生の中庸のもの	発生の甚しいもの
山本ら, 1953	富士 昭玉	橘早生 岡山早生 伝十郎 離核	神玉 興津 中山金桃 白桃	白鳳 大久保 高陽白桃
椎名ら, 1966		錦 興津	倉方早生 大久保	白鳳 砂子早生
高梨, 1978	レッドヘブン 中国野生桃	愛知白桃 倉方早生 錦 大久保	金桃 中津白桃 布目早生 清水白桃	白鳳 白桃 高陽白桃 神玉 砂子早生

Method for Evaluation of Varietal Differences in Susceptibility to Peach Bacterial Spot. By Yuko SUESADA  
(キーワード: モモ, せん孔細菌病, 抵抗性評価法)